

Title	観心寺史要(富賀鹿藏編纂, 大日本楠公會發行)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.3 (1931. 9) ,p.203(545)- 204(546)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19310900-0204

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

施浴のことより光明皇后の傳説も生じ、著者は未來の法樂を想うて現世の苦行を敢てせられし皇后と、同時代に海の彼方華清宮溫泉にあつて、享樂三昧に耽溺の楊貴妃と比較し、又遠く聖エリザベツト女が十字軍遠征の記念たる癩病の感染者に施浴せしめた事を比較し、面白く評せられて居る。

我が國に於て、入湯を來客に對する馳走の一に數られたが如く、中世紀歐洲にありては婚禮に於ける一禮式として結婚浴宴なるものがあつた。又著者は我が國洗湯を以て庶民の慰安所となし、吉原が大名富豪の俱樂部であるならば、湯屋は正しく無力な都民の慰安所であらねばならぬ。しかも湯屋は此の弱い人々に取つては棄て難い樂土であつた。湯屋の來した繁昌も決してその所以なきではない。徳川時代の湯屋は新聞紙の代用であつた。湯屋に走るが社會相を知る近道である。此間の消息に通じ人情の弱さ強き色取りを巧に書き下したものに式亭三馬の浮世風呂があるなど、面白く記述せられ、讀者をして興味津々湧出するを覺えしめ、思はず讀了を急がしめるのである。以上は本書の一部の摘録である。

最後に著者に對して、本書典據史料中、再考を煩したるものがあるが、其の一二を掲げると、上流は下流民衆と共浴を避け、た爲に、一時他の來客を斷はらしめて浴室を專占した史料として、言繼卿記の「藤原中納言留風呂、各罷候」を引かれて居るが、如何と思ふ。又上流の者が下賤者との同浴を嫌ふ史料として、資益王記の「風呂張行之處、甲穢者入間自門歸了、民部卿彦五郎已ニ入間乙ニ觸了、慈慶院同觸穢了、」を引かれて居るが、神祇に奉仕する資

益王が觸穢者との同浴を忌んだもので、決して下賤者を忌んだ史料とは無らなと思ふ。

猶ほ我が施浴は主として寺院ではあるが、神社に於ても行はれたのではないかと思はれる。それは先年筆者の學生時代埼玉縣の鷲宮神社に古文書見學の節、境内の一新築二階屋へ案内され、同社司より當社にも施浴を行つて居つたので、最近この家を新築してこれを復活したものとて入浴を勧められた事があつた。

(昭和六、七、三〇、武田勝藏)

觀心寺史要

(富田鹿藏編纂)
大日本楠公會發行

觀心寺と聞けば、吾等は南朝の史實を物語る觀心寺文書、元弘三年後醍醐天皇の特に禁中に御迎への不動尊、又建築學上特殊の典型たる觀心寺様式等を直感すると共に、後村上天皇の檜尾陵並に楠公首塚を連想するのである。

當寺は草創古く、初め雲心寺と號し、後、空海の弘仁六年再興以來、觀心寺と改號し、又嵯峨天皇の勅願所となりし以來、御歴代の尊崇厚く、中古に後宇多天皇臨幸せらるゝなど、就中、南朝諸天子の叡信特に深く、正平十四年に後村上天皇、塔中總持院を行宮とせられ、又一山僧徒は楠氏一族と勤王を共にし、其の事蹟は青史に顯著たるものである。其の隆興期には四十六坊を數へしも楠氏一族の衰微と共に寺運次第に傾き、今は僅に中院一坊を存し、往時の名殘を留めるのである。檜尾陵楠公首塚はこゝに説述するを要せざるも、こゝに注意すべきは山内に於けるコウボ坂の

地にして、こは皇母坂にて後村上天皇御生母新待賢門院廉子の御墓の地を傳へ、又檜尾陵と同一形式の檜尾塚は高貴の御方の御陵と稱し、何れも近々陵墓参考地として御指定に相成るゝの事、余も先年親しく拜調せしこともあり、寔に欣喜すべきである。因に先年發見の當寺過去帳の報恩追資中に、當寺に御縁故深い、長慶天皇には御髪を山内に埋められしと附記せられて居るので、右の御塚を其の御埋髮の地に擬せられて居る。

次に特記すべきは當寺を中心として組織されし大日本楠公會のことで、こは余の知友たりし當寺顧問故山中梅園師が思想國難の秋に楠公精神の發揚を首唱せしものにかゝり、昭和二年十月大阪に於て發會式舉行以來東西有志の勢援を得て、燎原の火の如く増々進展し、着々として新事業を起し、又去る五月廿三日以來數日間、山内に於て楠公六百年祭を舉行し、日々數千の參列者を見るに至つた。

本書はこの六百年祭に際し、記念出版せられしものにかゝり、當寺の沿革より大日本楠公會の近況に至る迄を詳述せらしものである。終に余は編者富賀鹿藏氏の勞を謝し、合せて大日本楠公會首唱者故山中梅園師の靈を敬申する。(昭和六、六、二九、武田勝藏)

都久志 創刊號

(福岡市都久志 刊行會發行)

今次、九州の郷土史家筑紫賴定氏外三氏の發起にかゝり、都久志刊行會が組織せられ、其の機關雜誌として「都久志」が年六回刊

行せらるゝこととなり、先づ創刊號を惠投せられた。同會は又郷土史料寫眞、郷土文獻、稀書等の刊行を企畫し、既に刊行目錄も發表せられて居る。

九州北部が、我が古代文化の中心、近世に至る迄の外來文化の關門、はた外寇擊退の第一線たる等は周知の史實で、この中には先人未決のまゝに残され、將來に於て決せらるべき幾多の難問題が存して居る。仍つて如上、郷土史家の奮起は學界のため慶賀の一事である。同地にありて既に「筑紫史談」等の郷土史研究雜誌が刊行せられて居れば、其の姉妹と見るべき本誌は共によく協力し間隙なく郷土史研究上健全なる發展を切望するものである。因に本誌所載の長沼賢海九大教授の「九州の文化と博多」の一篇はお國自慢の一卷で面白く拜讀した。(昭和六、七、一〇、武田勝藏)

彙 報

昭和五年秋期史學研究旅行記

(目的地) 諏訪、天龍峽方面

十月十日の夜十時五分、飯田町驛を出發、一行は伊木先生と學生四人。

翌朝、深い霧につつまれた諏訪を通つて辰野で下車、直に伊那電鐵に乗換へた。伊那谷を走る當車は凡そ賃金の高きを以て有名であるが、又、其の軌道にカーブの多い事も記憶さるべきである。上元善光寺を車窓に筆み、坂道を通過して、八時半駄科驛に着く。